

作家の肖像

第 14 回

このコーナーでは、
毎回一人の作家を取り上げ、
美術評論家の酒井忠康先生に、
お話をうかがいます。



Photo: 関野欣次

1941- 安藤忠雄

あんどう・ただお
1941年大阪府生まれ。独学で建築を学び、69年に安藤忠雄建築研究所を設立。79年に「住吉の長屋」で日本建築学会賞、93年日本芸術院賞、95年プリツカー賞、2005年国際建築家連合(UIA)ゴールドメダルなど受賞多数。10年文化勲章を受章。17年国立新美術館で過去最大規模の個展「安藤忠雄展—挑戦—」を開催。

自然と格闘する姿勢

今から25年ほど前に行われた、ある美術雑誌の座談会。それが安藤忠雄さんとの初めての出会いでした。「現代美術の深層にまで関心が届いている人」——それが、安藤さんの話を聞いて抱いた私の第一印象です。それから少しして安藤さんは、「^{ちか}近^{あすか}つ飛鳥博物館」の建築で日本芸術大賞を受賞した。賞の選考委員に加わっていた私は、そのとき初めて安藤さんのもつ自然観、自然と格闘する姿勢を目の当たりにしました。格闘といっても、力でねじ伏せようとするものではない。一緒に転げ回り、泥んこになって仲良くなるとでもいうのでしょうか。とにかく自然を扱わせたらピカイチ。そんなイメージをもったものです。

そしてこのとき、共通の友人であった三宅一生さんの計らいで食事を共にしてから、安藤さんとの親しいお付き合いが始まりました。安藤さんは、著書が刊行されると、決まって直筆のサイン入りで贈ってくれます。自分が手がけた建築のイラストも添えて。そんなふうに、互いの著書や手紙をやり取りしながら、交流は長く続いています。

発想は衝突の瞬間に

会えばいつも、独特の大阪弁としゃがれ声でおもしろい話をしてくれる。それが安藤さんです。あるときは、「自分は今、内臓がほとんどない。生きているのが奇跡だといわれているから、最近よばれるのは建築についての講演でなく、『内臓がなくても生きていける』という話をする講演」と笑う。まったくサービス精神

が旺盛な人です。

また、ある授賞式では、受賞者としてのスピーチを終えて席に戻ると、次のスピーチを聞くやいなや、鉛筆と手帳を出してメモを取り始める。まるでその瞬間を逃すまいとするかのように。頭の中ではいつも思考が動き回っていて、それが外部の何かと衝突した瞬間、新しいことに気づく。この発想力が安藤さんの安藤さんたるゆえんであり、脅威なのです。

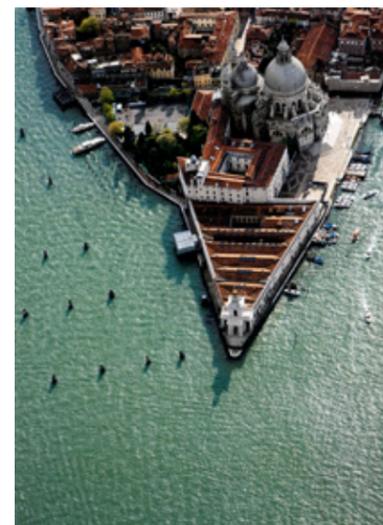
先頭に立って動く人

私は、安藤さんの「兵庫県立美術館」が好きです。美術館としては大きすぎるからか、あまり高い評価は得なかった。しかし、これを「街の一部」として考え、いずれ大きな文化施設に成長していくものと見るならば、この大きさには説得力があるでしょう。この美術館には、時間をかけて育てていく喜びが内在している。私はそこに強く惹かれるのです。

安藤さんが世界的な建築家として高い評価を得ているのは、その建築が気合に満ちていて、同時に、素直で気取ったところがないから。そして、彼が説教者ではなく、先頭に立って動く人であるからだ。私は思います。人間味豊かで、なぜか会いたくなる。人々は、そんな安藤忠雄の姿に魅力を感じるのかもしれませんが。(談)

酒井 忠康

さかい・ただやす
世田谷美術館館長、美術評論家。
1941年北海道生まれ。慶應義塾大学卒業。
神奈川県立近代美術館館長を経て現職。
光村図書中学校「美術」代表著者。



安藤忠雄を取り上げた雑誌。表紙に直筆のサインと、紙面でも紹介されている「上海保利大劇場」のイラストを添えて、酒井先生に贈られた。

上／「兵庫県立美術館」

外観 兵庫県神戸市 2001年

「兵庫県立美術館」は、阪神・淡路大震災からの「文化の復興」のシンボルとして建設。美術館の基壇部分から連続する「神戸市水際広場」は、防災拠点としての機能も考慮し、全長500mにわたって海沿いに展開する。

左下／「光の教会」

内観 大阪府茨木市 1989年

代表作の一つ。コンクリートの直方体に1枚の壁を斜めに立てかけたシンプルな構成で、正面に十字架のスリット窓を配置している。2017年開催の個展「安藤忠雄展—挑戦—」にて実物大で再現・展示され、大きな話題をよんだ。

右下／「プンタ・デラ・ドガーナ」

外観 イタリア、ヴェネツィア 2009年

15世紀に建てられた歴史的建造物「海の税関」を現代美術館として再生した。日本国内に限らず、イタリア、フランス、ドイツ、アメリカ、中国、台湾、韓国など、世界中で数多くのプロジェクトを手がける。